

(城西人文研究第 20 卷第 2 号)

【研究ノート】

エーミール・エルマティンガーの「ゴット フリート・ケラーの生涯」(再読)

鈴木敏夫

(1)

詩的写実主義期を代表するスイスの作家ゴットフリート・ケラー(Gottfried Keller, 1819-90)を対象とする研究書はすでに相当な数量にのぼっている。しかし個別作品や特殊テーマを扱うのではなく、作者ケラーの殆んど全ての代表作を網羅する包括的研究という点からすると、1900年以降に出たものの中ではエーミール・エルマティンガー(Emil Ermatinger)の『Gottfried Kellers Leben』(ゴットフリート・ケラーの生涯、初版1915/16、第8版は1949)と、ゲールハルト・カイザー(Gerhard Kaiser)の『Gottfried Keller, Das gedichtete Leben』(ゴットフリート・ケラー、詩的人生、初版1981、Insel Verlag)の二書を筆頭にあげることができる。

この小論ではこの二書のうち前者つまりエーミール・エルマティンガーの『ゴットフリート・ケラーの生涯』に依拠して、とくにケラーの主著『緑のハインリヒ』(Der grüne Heinrich, 初稿1855、改訂稿1878)に展開されるこの作品の成立過程、教育の問題、芸術作品の成果等のテーマをもう一度仔細に熟読検討し、この魅力のある作品の解釈への論者の取り組みの足がかりとしたい。

この作品の初稿と改訂稿の比較検討をめぐってさまざまな論議がされてきた。特に1978年にdtvからClemens Heselhaus編集の初稿が単行本として出版され、読み易くなったことで初稿への関心が高められたのではないだろう

か。しかし本論ではこのような比較論は扱わなかった。

(2)

ケラーは校則違反でチューリヒ州立の工業学校 (kantonale Industrieschule) を 1834 年に放校になった。そしてさし当り他の方法で学業を続けられなくなったため、社会人生活をはじめるとあって、職業として風景画家を志し、同年画家で石版画家のペーター・シュタイガー (Peter Steiger) の許で修業をはじめると、師への不満の気持ちから、1837 年には同じくチューリヒに住む画家ルードルフ・マイアー (Rudolf Meyer) を新しい師として勉強をはじめると。しかし翌年 38 年にはこのマイアーがチューリヒを去ったことで画業は中断される。

こうした事の成り行きは必然的結果というべきか、もしくはケラーに内在する絵画以外の他のジャンルの芸術に対する天賦の才の目覚めともいうべきか、とにかくこの時期にバルザック、ユゴー、シェークスピアの作品を集中的に読んでいることは、ケラー自身の日記や、これまでに発表された数多くのケラーの伝記的研究から確かめることができる。

また『緑のハイブリヒ』に登場するアンナ (Anna) のモデルといわれる従姉ヘンリエッテ (Henriette Keller, 1818-38) に対し初恋を経験している。

1840 年ケラーは正規の絵画の修業を継続するために芸術の都ミュンヘンに赴く。しかしこのミュンヘンでケラーはこれまでついに経験しなかった画業の精進に疑惑をおぼえるとともに、外国で生活し勉学するための経済的な困難に苦しむ。しかしそうはいっても一方ではしばしばこうした冷酷な現実を忘れて学生らしい無鉄砲な生活をも体験するが、結局失望して 1842 年 11 月に故郷のチューリヒに戻って来た。

そしてこの時以後絵画的野心は後退し、文筆活動に真剣に取り組む気持ちになる。

さて1848年ケラーは州政府の奨学金を得てハイデルベルク大学で研究することになり、同年10月にチューリヒを出発する。

翌1849年には、同大学で美学、芸術史および文化史担当の私講師ヘルマン・ヘットナー (Hermann Hettner, 1821-82) や哲学者フォイエルバハ (Ludwig Feuerbach, 1804-72) と親交を結ぶ。

この奨学金は本来資格認定をうける職業教育のためのものであったから、ハイデルベルク行きがケラー自身にとって結果的に有益かつ稔り豊かなものであったとしても、本来の目的に適っていたとはいえない。

1850年ハイデルベルクを去ったケラーはケルンを経由してベルリンに旅行する。ここでフィーヴェーク (Vieweg) 書店と知り合い、『緑のハインリヒ』初稿の執筆にとりかかる。

以上がこの作品成立に至るまでの客観的な事実の概略である。

(3)

ケラーの主著である『緑のハインリヒ』は自伝小説であるから、作品成立時に至るまでの幼時からの家庭および周囲の環境がこの作品の中に直接的、間接的に反映していることは当然のことである。ここでは単なる年譜の記載のみではなく、再び若干年代をさかのぼり、またもう少し詳細に立ち入った考察を試みたい。

ケラーの父ヨーハン・ルードルフ (Johann Rudolf Keller, 1791-1824) は轆轤細工の親方であったが、若い職人の頃遍歴の途中ウィーンに立ち寄り、会議は踊るで有名なウィーン会議に集まった人々の優雅な暮しと劇場を知ったとされているが (W. Baumann : Keller-Leben, Werk, Zeit, S. 17), 後には建築請負業者になるのが念願だったらしい。作品の中でも轆轤細工師としては登場していない。この父は企業家としてまた社会的経歴の点で良い評判を得ていた。そして後に息子の詩人ゴットフリートが通うことになったいわゆる「貧民学校」の共同設立者の一人でもあった。

この父は5歳の長男ゴットフリートと3歳年下の長女レーグラ (Regula) を残し、1824年8月12日33歳の若さで死亡した。

ケラーの母エリーザベト (Elisabeth 旧姓ショイヒツァー Scheuchzer) は夫の死後2年目に同業の職人ハンス・ハインリヒ・ヴィルト (Hans Heinrich Wild) と再婚するが、1834年には離婚している。

ケラーは『緑のハインリヒ』に関するハイデルベルク覚書で、母の再婚を「背信行為」、「罪」と非難する一方、この再婚を阻止できなかった彼自身の責任をも反省している。

とにかく市民的人間の理想像としての父親と、息子の成長と教育のために身を粉にして努力した母親への感謝の思いがこの作品のとりわけ結末の部分にこめられていることは容易に理解できることである。

ケラーの生れ故郷チューリヒにはザロモン・ゲスナー (Salomon Geßner, 1730-88) やヨハン・マルティン・ウステリ (Johann Martin Usteri, 1763-1827) のように画家にして詩人という先達が存在するという実例が示すように、独特な精神的な風土があるという指摘がなされている。(Reiner Puppe : Gottfried Keller, Der grüne Heinrich, S. 15)

ところで画家それも風景画家になるための努力をし、ある程度の力量を示した後で詩人に方向転換をしたケラーを育てた土壌があったにしろ、最初の師ハーバーザート (Habersaat. これは既出のペーター・シュタイガーがモデルと考えられる) の許での修業の中味が余りにも機械的に千篇一律で、芸術的創造性が欠如していることに不満が生ずる。それが原因で芸術性を追求するために二番目の師レーマー (Römer. ルードルフ・マイアーがモデルと考えられる) に教えを乞うのである。しかし現実のケラーも、作品中の主人公ハインリヒ・レー (Heinrich Lee) にしても幼時に父を失ない、決して経済的に豊

かでない母子だけの家庭育ちの若者が、たとえ同一の職種でなくても亡父のような職人的・市民的な職業に就かず、努力してもその成果が予測できない芸術家を選んだその決断の中に、主人公かつまた作者の理想主義的で、さらには健全な市民生活に距離を置く人生観が垣間見えてくる。

『緑のハインリヒ』は主人公ハインリヒの前半生における内面的な発展を描いている点で発展小説・教養小説と呼ぶに相応しいが、主人公が芸術家としての人生を選択したことでまた芸術家小説でもある。この主人公の設定がこの作品を魅力に満ちたものになっていることも一つの事実である。

(4)

『緑のハインリヒ』は教養小説である。エルマティンガーはケラーに至るドイツ教養小説の系譜をたどり、そこに教養の理念の変遷を確めていく。

彼のあげる最初の教養小説はヴィーラント (Christoph Martin Wieland, 1733-1813)の『アーガトン』(Agathon, 1776)である。この作品の描く「精神的並びに道徳的な迷妄からの覚醒の経過は、ドイツにおける現世と、また超現世的な事柄についての熱狂的考察から、現実と感覚的世界の冷静な考察へと進んでいったあの世代の大いなる体験であった。」(S. 273)と述べて、『緑のハインリヒ』のような「大がかりな教育小説は著者の個人の形成の混乱と心情の混乱を描くのみならず、同時にまた彼の生きている時代、または少なくとも彼と同時代の人々の重要なグループの原理的な教育問題をも描き出している」(S. 273)個人をこえた普遍性を獲得しているから、両作品に共通性があるとしている。

次いでゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』(Wilhelm Meister, Lehrjahre, 1795-96, Wanderjahre, 1821-29)があげられる。「若者の狂気からかれて教育を演劇という金ぴかの世界にもとめたヴィルヘルムが演劇におかげをこうむるのは高度の教養を積んだ貴族の世界に受け入れられたことのみであ

る。彼はある同盟のメンバーであり、この同盟の目的は同邦の繁栄である。〔…〕ヴィルムヘルムは慈善家としても、単純な私人であり続ける。それは啓蒙的な専制主義から19世紀の民主的な理念への一つの接近である。今なお欠けているのは政治的、公共的なものへの関心である。」(S. 273~274)として、ヴィーラントよりも一步の前進、政治的、道徳的な関心における次代、現代への接近を認める。

次に来るロマン主義については「もっぱら美学的に物を感じとめる利己主義の支配を、また社会全体、つまり他人に対する義務からの分離を意味している。全てのロマン主義者は、人生において唯一現実性と価値あるものは、理念的かつ精神的なものであり、天才的人間こそはこの理念的・精神的なものの最高の担い手であるという確信から出発している。」と全体的な評価を下している。

ロマン派の中ではケラーがもっとも大きな影響を受けたジャン・パウル(Jean Paul, 1763-1825)については他の作家より少々詳しい。ジャン・パウルの作品『巨人』(Titan, 1800-03)の主人公アルバーノ(Albano)について「彼はルソオ風の感情の熱狂から、澄明で高貴な魂の美しさと、また自分の国の賢明な行政へとみちびかれていく。彼の発展の三段階を彼の三人の恋人が特徴づけている。エーテルのような感傷的な若い乙女リアーネ(Liane)は世間に疎い若者の理想主義を。強い精神性をもった、成熟した女性リングダ(Linda)は大人に成長した男性の感受性を。美しい魂の持主であるイドイーネ(Idoine)は円熟した男性の一般的感覚を。」(S. 275)と。この「発展の三段階」というのは『緑のハインリヒ』のアンナ、ユーディトとドルトヒェンの組合せに似ている。

ここまでの系譜は全てケラー以前のものであるが、それらは単独に、また入り組んでケラーに影響をおよぼしている。

しかしゴットヘルフ(Jeremias Gotthelf, 1797-1854)の場合はケラーと同じスイスの出身で、生きた時代もほぼ重なり、同時代の作家として互いに相手の存在を意識し、影響し合っている。ゴットヘルフの処女作でありかつ代表

作とも云える『農民の鑑』(Bauernspiegel, 1837)は別名が『イエレミアス・ゴットヘルフの生涯の物語』(Die Lebensgeschichte des Jeremias Gotthelf)とあるように『緑のハインリヒ』同様一種の自伝文学、教育小説である。ゴットヘルフは自由思想、唯物論的な考えには理解を示さず、むしろ禁欲的、諦念的であって、世界観の上でケラーとは対立していたかも知れないが、叙事文学の大家であることはケラーも認めている。その作品の世界はベルン地方の農民の世界に限定されていた。「ケラーはその題材の豊かさをゴットヘルフと競い合いたくはなかったであろう。だがおそらくケラーの視野の広さ、世界観の明るさと彼自身の長編小説の芸術的形成の円熟さがゴットヘルフの往々にして神秘的な恣意と無形式とから身を守ることができたであろう。」(S. 278)と指摘している。

『緑のハインリヒ』にはドイツ文学の「古典主義、ロマン主義、青年ドイツ派の伝統」そして「キリスト教的、農民的な人生の理想」(S. 278)に連なっている。

(5)

主人公ハインリヒの教育が委ねられ五つの契機として：家庭環境、隣り近所と学校。宗教。愛。芸術。政治があげられている。

先ず主人公の母は息子の教育の方針として「意識的であるよりは、穏健かつ控え目である」(S. 279)ケラーの他の作品の場合と異なって、自分の夫つまり主人公の父が「向上をめざす、有能な市民の理想的存在」であって、この早く他界した夫の「指図に従って」教育しようとする。そのために彼女は市民の慣習に反して、息子を先ず費用のかからぬ貧民のための学校に送りこみ、やがては(その上の)実業学校に入れる」(以上 S. 279)

また息子が「母親の貯金箱をあらし、それに彼女が気づいたとき、それでも貯金箱を再び書物机の中に戻しておいて、鍵を差し込んだままにしておく。」母親は息子を叱らずに「ハインリヒが自からすすんでよい方向に向う」ことに

運に任せている。そして彼女の蒙った災難に対しても、「息子の夢想的で、成り行きまかせな性癖を育てやっている」(S. 279) そしてこういうやり方は「個性の自由な発展を目指す、ロマン主義的な教育理想を想起させる」とロマン主義の影響を述べている。

母親の「宗教は合理主義的で、非敬虔主義的な色彩を帯びている」のに反してハインリヒは「教会の塔の上の金色の鶏や、絵本の中の見事な虎のような物に先ずすがりついている」としてその子供らしい空想性から宗教的感情の芽生えをとらえている。この宗教的感情はアンナの父との出会い、ミュンヘン遊学時代の無神論者フェルディナント・リース (Ferdinand Lys) との決闘、またハイデルベルク大学での聴講の経験を通じ、変化、成長をとげていくが、彼が画家として挫折し、経済的、精神的な窮地に陥ったとき、神に救いを求めもいる。これは帰郷の途次ハインリヒを救ってくれた伯爵とドルトヘン・シェーンフントとの出会い、そしてまた息子の教育のために母が「唯一、一回かぎりの、またかけがえのない生命を失った」ことでキリスト教的信仰の残滓を捨てざる。

ハインリヒとアンナおよびユーディトという二人の女性の関係は「二重恋愛というルソオ的、ロマン主義的モチーフ」(S. 284) の掘り下げと拡大であると分析されている。しかもフォイエルバハ体験がケラーをしてこの二人の女性に対する愛を鋭く区別し、かつまたアンナの死という象徴的な出来事を契機に、ユーディトの感能性のアンナの精神性に対する優位という自然の変化に最終的な決着がつけられたとエルマティンガーは見ている。

芸術家の精神的発展がテーマとなっているロマンの実例は、詩人が主人公のノヴァーリス (Novalis, 1772-1801) の『オフターディングン』(Heinrich von Ofterdingen, 1800)、シュレーゲル (Friedrich von Schlegel, 1772-1829) の『ルチンデ』(Lucinde, 1779) や、ティーク (Ludwig Tieck, 1773-1853)

の『フランツ・シュテルンバルトのさすらい』(Franz Sternbalds Wanderungen, 1798)では画家である主人公を描いているが、「ケラーはノヴァーリスのつかまえどころのない神秘主義と、ティークの生気のない饒舌を、ゲーテの『マイスター』に似て、啓蒙的な芸術論議に成長中の芸術家の造形的な仕事を素朴に誠実に対置し、そうすることで叙事詩的な出来事の可能性を獲得して、凌駕するのである。彼の関心はロマン派の人々が解体した芸術自体に向うのではなく、自己を形成する芸術家に向けられている。それは心理学的関心であって、芸術理論的関心ではない。」(S. 288)とケラーの芸術家小説の特性を指摘し、また両者の作品としての優劣を論じている。しかしケラーの芸術的創造の根源にはやはり「実体なきもの」「大言壮語」への愛着が顕著であったことを否定していない。

画家に代表される芸術の修業が全てプラスの面だけではない。芸術の都に出たハインリヒが付き合ったデンマーク人のエリクソン(Oskar Erikson)はおそらくハインリヒよりも豊かな画才に恵まれていたが、世俗に超然として、絵画が全てと思っただけではない。同じくオランダ人のリース(Lys)はすでに死に絶えてしまった先祖の豊かな遺産の上に胡座をかいている。この二人の友人とロザリーエ(Rosalie)とアグネス(Agnes)という二人の女性をめぐる纏れた関係が、彼ハインリヒに「芸術家気質の孕む危険」を啓示してくれる。そういうことは彼には縁遠いことである。ここにケラーそしてハインリヒの求めた芸術と芸術家の理想像がうかがえる。

ハインリヒの己れの画才への懐疑と、芸術家という存在への疑惑、そして経済的困難の苛酷さが、ハインリヒにそれまでに描きためた画とその他の所有物を順次売り渡たさせることになる。こうして画業は完全に失敗する。

ハインリヒがスイスの市民であり、市民であるために課された政治的な責任を忠実に履行する態度をもっとも典型的に物語っているのは兵役であろう。市民の義務に忠実であれと主人公に教えたのはこれまた模範的な市民であった彼の父である。中学生のときの軍事訓練、ユードイトがアメリカに渡るとき彼は

再び軍事訓練をうけている。もっともケラー自身はその生涯で一度もこの訓練をうけてはいないと云われているが。

(6)

『緑のハインリヒ』の中では彼の青春物語がかなり大きな部分を占めている。単に作品全体に占める分量の多寡が問題になるのではない。この青春物語は主人公の挫折に終わっているにも拘らず、作品全体でもっとも成功している部分、もっとも美しい部分である。

およそこの世に生を受けた者にとって、青春時代は人生の無限の可能性を孕み、かけがえなく貴重な、人生の美しい花の時期である。そのことを知らぬ人はいないし、詩人たる者、またその他の全ゆるジャンルの芸術家たちが競ってその美しさ、貴重な価値を讃えてきた。『青春は美し』(Schön ist die Jugend, 1916) というヘッセの作品がいみじくもその本質を言い当てているように。ケラーのこの青春物語はドイツ文学の中でもっとも美しいものの一つに数えられる傑作であると思う。

ケラーが決して豊かでなかったその少年時代、青年時代の生活を写実主義という枠の中でいわゆる自然主義的な刻明さでもって丹念に描いたとしたら、今我々の手許に残されているような魅力的な作品に成りえたかと問うと、否であると云いたい。

エルマティンガーはこう云っている。「この青春物語の題材のかなり多くの部分を彼自身の青春物語が提供している。彼の評論『自伝風なもの』(Autobiographisches) で彼は自分から、現実の乏しい芽と徴候をどのように詩的に成長させたかを指摘している。また作品『緑のハインリヒ』とケラー自身の人生の比較してみると〔…〕彼が自ら体験したことを叙述している場合でも、彼が偉大な芸術家の創作力を示しながら実行していることを教えてくれる。〔…〕彼はこの作品の中で詩を示そうと思ったのであって、真実を示そうとは

思わなかった。」(S. 291) と。

このことは、放校されたハインリヒが母のとりはからいで訪れていくグラットフェルデンの田舎の伯父の農園は、作品の中では「ゴットヘルフの立派な大地主のように」(S. 292) 大そう富裕なものになっているが、事實は「非常に貧弱な大ききで、ケラーが休暇の折りに住んだ屋根裏部屋もまた貧弱なものであった」(S. 292) らしい。

こうした誇張は「都会での母子の局限された貧しい生活」に「自由で豊かな自然としての田園生活が対比されねばならなかった」(S. 292) のである。

ハインリヒとアンナが村人たちと一緒に参加する野外演劇のシラーの『テル』(Wilhelm Tell, 1804) にしても、実は同じシラーの『ヴァレンシュタインの陣営』(Wallensteins Lager, 1798-99) の取りかえであるという。そしてこの取りかえがかえって豊饒な効果をうみ出している、としている。

この青春物語の中核を形づくっているのは、アンナとユーディト、それにドルトヒェンという三人の女性像と、ハインリヒとの恋愛関係である。

ケラーは生涯結婚せず独身を通した。アンナのモデルといわれる従姉ヘンリエッテに対する初恋の体験にしても炎のように燃える激しいものではなく、ケラーの胸に消えぬ思い出を刻んだとしても、おそらくは最初から距離をおいた、諦念に包まれたものだったのではないか。ケラーが『緑のハインリヒ』で恋愛に付与した力は、それほど普遍的なものではない」(S. 282) としてロマン派の詩人たちが考えたように「愛は力」であったり、また「男性の教育にとって最高の意味をもつ」(S. 282) というほどに恋愛を絶対視はしないが、ケラーの控え目で物静かな愛のとらえ方が、他の詩人の描きえないような、独自の魅力をもった女性像と愛のかたちを、おそらく詩人自身ですら想像できなかつたように純粹に結晶させて創造することに成功したのである。

(7)

エルマティンガーがあげているいくつかのこの作品に対する批評は、その選

扱の適切さと、批評内容の多様性の点で、読む人に改めて新鮮な印象を与えてくれる。

その筆頭にあげられるのはケラーの母と妹のものである。ケラーは自分から母に『緑のハインリヒ』を読ませなかったらしい。彼女に作品を読むことを勧めたのは母の知人のフライク (Rudolf Flaigg, 1817-1863) という人物であるが、最初教師をした後、ネッカー川を航行する汽船の船長や、公務員、鉄道監督官を経験し、文学活動も試みたという。母の批評は1854年3月11日の息子ケラー宛の手紙に認められている。少し長いが面白いので全文を引用してみる。

「この作品は私たち二人の心を大変うちました。とくに主内容がお前の青春時代と、子供の頃の生活と学校生活にふれているからです。また全てが姿形を変え、転換されて描き出されているにも拘らず、こうした体験を一番よく知っている人物たちが、真実を取り出してみせることを心得ているからです。私はお前の大切な、忘れることのできない父親の思い出と、記念のしるしを至極満足して読みました。レーグラは、どこにも自分(妹)の記述がないことに苛立っています。つまりお前が彼女を妹とみなすことを恥じているみたいだと、人々がそこから判断するだろうということです。そんな謂れはないでしょうよ。そもそもこれはロマンなんですから、と私は云ってやります。この作品に対する価値判断は他の人に任せることにしようではありませんか。」(S. 300~301)

『緑のハインリヒ』では主人公は母子二人だけの家庭に育ったことになっていて、妹はいないことになっている。現実の人生では三歳年下の妹レーグラが存在し、この兄妹は生涯にわたり親密であったのだから、作者ケラーがどのような理由、配慮からこの妹を無視して母だけを作品に登場させたのかは不明である。母の読後感は当然のことながら、早く世を去った夫のことが、息子の作品に尊敬の念をこめ、かつ多少とも美化されていることへの喜びである。

次にはエルマティンガーが最も高く評価している批評、つまりヘルマン・ヘットナーの批評である。ヘットナーはケラーが州政府の奨学金を得てハイデルベルク大学に学んで以来親交が続いていた。当時彼は大学の私講師であったが、1851年にはイエナ大学の助教授、また1855年にはドレスデーンの王立美術収集館の所長をつとめていた文学、美学の研究家である。彼はケラーのこの作品の最初の三巻を読了後1854年2月19日に次の内容を手紙に書いている。

「再度にわたり創造的な作用を及ぼすということは、全てのすぐれた芸術作品の特徴です。あなたの長編小説には安らぎと、心の落ち着があります。私は云いたいのです。観想の静寂さを私の心の中に惹きおこしてくれたと。そしてまたこの内省をしばらく引き留めておき、この調和のとれた気分を呼びおこす芸術的手段を説明することを私に強いるのです。私はあなたの創造行為に対し心からお祝いを申し上げます。この創造は疑いもなく我が文学界においてあなたに永遠に傑出した地位を保証するでしょう。

あなたのロマンから我々の心の奥底にかくも深くかつ持続的に語りかけてくるものは、我々がこの作品において一つの必然的に成立した作品、恣意によって作られたのではない作品とかかわり合っているのだという感情です。〔…〕我々はここに最高の意味で詩と真実を有しています。自分で内面的な教養生活を送った人は誰であれ、自分自身のもっとも固有な本性をこの作品の中に再発見するのです。〔…〕とくに田舎における抒情的な夏、牧師の家族、校長さん、愛らしく精神的なアンナと健康的に感能的なユーディト、素朴でかつ常に冷静で思いやりの気持ちを持ち、多様な情況と紛糾の中を駆けぬけていった主人公自身、そのそれぞれの描写は場面描写と性格描写の点で巨匠の技巧をもっている。〔…〕この青春物語は一箇の宝石である。そして私は、作品の主人公と詩人をば私の友人であると呼びかけられることを誇りに思っています。」(S. 301~302)

この評言の適切さは、作者ケラーにとって心強いものであったに違いないし、評伝作者 エルマティンガーにとっても力強く、好都合なものであったに違

ない。ヘットナーはケラーの作品の本質と価値とを見据えている。とくにこのロマンがもっとも生气に溢れ、美しい響きを立てている部分が、いわゆる青春物語であることは否定できない。自伝的なこの小説の詩と真実のかね合いにおいて、かりに詩が真実を虚飾しているとしても、この美しい物語詩を創り出したすぐれた芸術性を否定することはできないであろう。たとえ「このロマン全体が青春物語に較べて比較にならぬほど弱い」という作品全体の構成上のアンバランスがあったとしてもである。

《参考文献》

この研究ノート作成にあたり使用したテキスト、文献は以下の通りである。

- (1) Emil Ermatinger: Gottfried Kellers Leben. Mit Benutzung von Baechtolds Biographie dargestellt von Emil Ermatinger. Achte, neu bearbeitete Auflage mit sechzehn Bildtafeln und vier Faksimilia. (Artemis-Verlag Zürich 1950)
- (2) Königs Erläuterungen und Materialien. zu Gottfried Keller : Der grüne Heinrich. neu bearbeitet und ergänzt von Reiner Poppe.(C. Bange Verlag. Hollfeld)
- (3) Walter Baumann: Leben. Werk. Zeit. Gottfried Keller. (Artemis. Verlag. Zürich und München. 1986)

「引用文」は明記していないかぎり上記(1)を意味する。